教員紹介　国際学科
International Studies

英語圏文化論・イギリス文化論

出羽　尚　いずは　たかし

イギリスの文化、とくに美術がわたしの研究対象です。専門的な言い方では美術史学と呼ばれる分野で、美術史学が対象とするのは絵画、彫刻、工芸を中心に、建築、ファッション、写真など多岐にわたります。

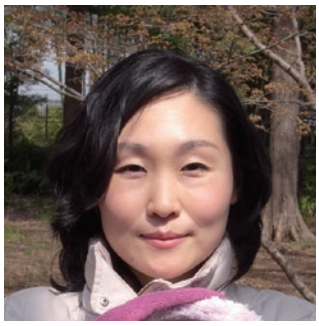
あまり触れることのなかった学問かも知れませんが、案外皆さんの身近にも関わっています。例えば、旅行。イギリスと言えば、大英博物館（＝美術館）、セント・ポール大聖堂（＝教会・寺院）、ストーンヘンジ（＝遺跡）などの名が挙がるでしょう。イギリスに限らず、美術館、教会・寺院、遺跡はたいてい人気の観光地になりますが、いずれも美術史学が研究対象とするものです。旅行はまさに美術史学の勉強、と言っても過言ではありません。

逆もまた真。美術史学の基本は歩くこと、見ること。旅と同じです。そこが大きな魅力です。

担当授業科目
イギリス文化論　イギリス文化論演習
Cultures of the English-Speaking World

izuha@cc.utsunomiya-u.ac.jp

文学　表象文化論



大野　斉子　おおの　ときこ

フランスとの比較の視点からロシアの文化と文学を研究しています。

もともとフランス語の勉強をしていた私はドストエフスキイの1冊の本と出会ってロシア文学に引きこまれました。それから文学、メディア、宮廷文化、香水など様々なものに関心を持って研究してきました。思えば私に次々と新しい世界を開いてくれたのは本や人との出会いでした。

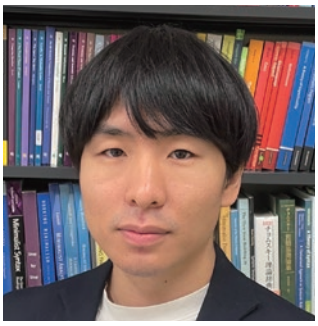
皆さんが今の日本で触れることのできるロシア文化はたくさんあります。文学作品やバレエ、絵画、音楽などロシアが発信する優れた文化は、もとをたどればヨーロッパの文化とロシアに古くからあった文化との出会いから生まれたものなのです。

出会いは何かを生み出す原動力になります。大学は様々な分野の授業があり、留学もできる開かれた場です。何を勉強するのも自由なのです！大学で、あなたに世界を開くなにかをたくさん見つけてください。

担当授業科目
芸術文化論　表象文化論

tokiko@cc.utsunomiya-u.ac.jp

言語学　第二言語習得



木村　崇是　きむら　たかゆき

私たちは皆、ある言語の母語話者であり、多くの場合、他言語の第二言語学習者でもあります。私の研究では、生成文法理論に基づき、母語話者や第二言語学習者がもつ言語知識（主に形態・統語や意味）の解明を通して、人間が共通にもつ普遍的かつ遺伝的な言語能力を解明することを目標としています。

一般的に、私たちは子どもの頃に母語の文法について明示的に教わることはありませんが、教わってもいない複雑で抽象的な言語知識を自然と身につけています。また、第二言語についても、母語とも目標言語とも異なり、学校で教わってもいないような独自の知識体系を学習者は作り出します。このような不思議な現象は、生成文法などの言語理論で大枠は説明可能であることはわかっていますが、未解明・未解決の問題が山積しています。言語の話者・学習者として、自分達の頭の中で一体何が起こっているのか、是非一緒に考え、謎を解き明かしていきましょう。

担当授業科目
言語学　言語学演習
Learning a Different World through English

tkmr32@cc.utsunomiya-u.ac.jp

国際協力

栗原　俊輔　くりはら　しゅんすけ

国際協力の分野は、広く、深く、そして分かりにくい。私たちのまわりには、食糧や工業製品を始め、途上国で生産されているものがあふれ、経済やITを中心に世界はますますグローバル化が進んでいる。しかし、先進国と途上国の格差や、途上国での低賃金や機会の不平等など、社会的側面を見逃すことはできない。私たちの豊かな生活のために誰かにしわ寄せが行っているのではないか。世界はますます深く複雑につながり国際協力のあり方も問われている。先進国から途上国への支援という一方的なつながりではなく、どのような場面でどのように世界とつながっているのか、また、果たして正しくつながっているのかを分析し、問題解決への道筋を探すことを通し、これからの国際社会そして日本のあり方を考えていきたい。

担当授業科目
国際協力論　国際協力論演習
国際キャリア教育関連科目　海外フィールドワーク演習Ⅰ・Ⅱ

shunsuke@cc.utsunomiya-u.ac.jp

村落社会学　知識社会学

古村　学　こむら　まなぶ

「田舎」や「僻地」と呼ばれるような村落社会、とくに日本の離島や中山間地域をフィールドとして勉強させてもらっています。自然保護などのグローバルな現象を地域に住む人々はどのようにとらえているのか、そして、それはどうしてなのか。住込み調査などの手法で、そこでの生活を理解することによって、人々の日常生活の視点から見たグローバルな現象の意味について考えています。

地域社会は過去にはどのような社会であったのか、なぜ、どのように変化していったのか、現在の状況はどうなっているのか。これらのことを現地に生活する人々の視点から学んでいくこと、とくにフィールドの場で、みずから学ぶことを重視しています。そのことによって、グローバルな価値観を単純に受け入れるのではなく、地域ごとに異なるローカルな価値観から批判的に考えていきたいと思っています。

担当授業科目
社会調査法入門　地域社会論　地域社会論実習

komura@cc.utsunomiya-u.ac.jp

アフリカ地域研究　社会開発論

阪本　公美子　さかもと　くみこ

人間にとって発展、よい生活とは何でしょうか？　近代化論や従来の経済学では、人類が欲を満たし、富を蓄積することによる経済成長が他者や他地域に波及し、社会開発も伴うと信じられてきました。しかし国際・国内格差はむしろ拡大しているだけではなく、経済成長した地域でも多くの社会・環境問題が山積しています。現在、世界は経済成長のみならず、持続的開発目標（SDGs）に取り組み始めていますが、多様な経済・社会・文化を理解し、発展のあり方を見直す必要も出てきています。

授業では、アフリカにおける勤務・研究経験を活かしながら、地域規模の問題群を私たちの生活とつながりのあるものとして認識しつつ、理論やアフリカ地域について学び、世界の経済・社会状況を理解する目を養っていきます。

担当授業科目
アフリカ論　途上国経済発展論　アフリカ論演習
東アフリカの社会開発と文化

ksaka@cc.utsunomiya-u.ac.jp

国際関係論　国際機構論

清水　奈名子　しみず　ななこ

国際関係を研究する学問が確立したのは、「戦争の世紀」と言われた20世紀になってのことです。その課題は常に、「戦争と平和」の問題に向き合うことでした。なぜ国々は武力を用いて争い合うのか、どうすれば異なる地域や文化に属する人々が共に生きていくことができるのかを考える作業が、その中心となります。

現代世界を見渡してみても、武力紛争や大量破壊兵器の拡散、テロ、内戦での集団殺害など、多くの問題が存在しています。国際関係を学ぶということは、これらの問題はなぜ起きるのか、またどうすれば解決できるのかを粘り強く考え続けることです。授業では、世界の諸問題に対処している国連などの国際機構の働きを学びながら、私たちが生きている世界に何が起こっているのかを一緒に考えていきたいと思っています。

担当授業科目
国際関係論　国際機構論　国際関係論演習

nshimizu@cc.utsunomiya-u.ac.jp

社会学、移民・エスニシティ研究

申　惠媛　シン　ヒェウォン

社会学を軸に、日本におけるエスニック空間の研究に取り組んでいます。特に、多国籍・多文化化する地域でどのような社会関係が編みなされていくのかに関心を寄せています。

「エスニック」と聞いたとき、どのようなイメージをもつでしょうか？最近では身近になった「エスニック料理」や「エスニック・タウン」を思い浮かべる人も多いのではないでしょうか。その「エスニック料理」を提供する人々はどこからどのように来日し（あるいはせず）、どのような経緯でその地域に拠点を構え、ビジネスに従事するようになったのでしょうか。また、そうしたお店や施設が集積し「エスニック・タウン」が形成されていったことは、近隣に住む・働く・学ぶ・集まる人々とどのような関係にあるのでしょうか。そして、これらの状況はどのような文脈のもとで生じているのでしょうか。このように、身近な出来事を深く広く掘り下げ、より学術的に読み解く面白さを、ぜひ満喫してください。

担当授業科目
国際社会論　人の国際移動
人の国際移動演習

hshin@cc.utsunomiya-u.ac.jp

ラテンアメリカ論

Ana Sueyoshi　スエヨシ　アナ

ラテンアメリカと聞くと、日本から非常に遠いところにあり、全体的に同じような国々があるという印象を日本人は持っていると思います。しかし私はこのような画一した見方を乗り越えられるように授業をする予定です。

アメリカが発見されてから、アメリカ先住民の古代文明は西洋世界と接触し、現在知られているような新しくて特徴的な地域が作られてきました。ラテンアメリカとカリブ海諸国はしばしば同質的だと考えられています。なぜなら、これらの国々は言語、宗教、歴史などにおいて共通の面を持っているからです。しかし実際には、原住民とスペイン、ポルトガルからの征服者が出会い、またアフリカ、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの影響で文化が混ざり合い、ラテンアメリカ諸国は社会的、経済的、政治的なユニークさを持つようになりました。このような同質さの中の異質さは、ラテンアメリカの最も魅力的で面白いところです。

日本とラテンアメリカおよびカリブ海沿岸諸国との経済・文化面での交流が最近増えてきたため、ラテンアメリカとの距離は近くなってきています。その距離をもっと狭めることができるようにラテンアメリカの社会、文化、経済、政治、歴史を学生に紹介して刺激を受けてもらい、将来の研究や仕事の参考にしてもらいたいと思っています。

担当授業科目
Introduction to Latin American Studies
Latin American Politics and Society
Seminar in Latin American Studies

sueyoshi@cc.utsunomiya-u.ac.jp

東南アジア政治研究

Sugit Arjon　スギット　アルジョン

国際関係の分野では、グローバル ガバナンスと市民社会という２つの主な行政機関を扱うことがよくあります。

グローバル・ガバナンスはまた、二国間および多国間協定、明らかな矛盾、不安定なダイナミクス、および未解決の問題に満ちた研究です。したがって、この概念は、世界の経済、政治、文化、安全保障などの特定の問題から切り離すことはできません。

個々の側面がグローバル ガバナンスの最近の発展を後押ししており、ローカルおよびグローバルに発生しているセキュリティと経済の動向によって、定期的に集合的に引き離されています。重要な問題は、世界的なガバナンスがより大きな協力または対立に向かっているかどうか、および国家や他の関係者がその方向にどのように影響するかです。

さらに、過去20年間、私たちは社会運動の台頭とその出現方法に注目してきました。この運動は、安全保障、国家のイデオロギー、政策、文化、アイデンティティに影響を与えます。

社会運動は、市民的不服従、抗議、フレーミングなどの特定の戦略を検討することによって変化をもたらします。

担当授業科目
Global Civil Society
Seminar in Global Governance
Theory of Global Governance

sugit@cc.utsunomiya-u.ac.jp

国際環境協力

髙橋　若菜　たかはし　わかな

せまりくる気候危機、海洋プラスチック汚染、森林破壊、種の絶滅に、放射能汚染。21世紀に入り、環境問題はますます深刻化しています。問題の解決には何が必要なのでしょうか？科学技術、資金？それとも法律、あるいは人々の意識でしょうか？

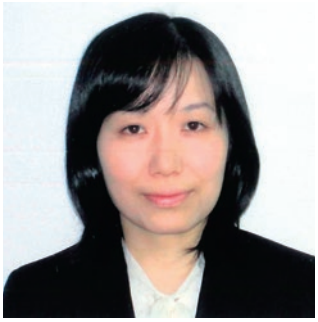
これら全てを方向づけるのが、政治です。徹底した情報公開、報道の自由度の高さ、地方分権、開かれた政策形成プロセスと、様々な次元での市民参加・ジェンダー平等などは、総じて、多様性を重んじる人に優しい環境取組を可能にしています。

授業では、スウェーデンをはじめとする国内外での学際的共同研究や、国や自治体の審議会、NGOなどの実務経験を活かして、座学だけでなくフィールドスタディを通じ、カーボンニュートラルな循環型社会へ向けての持続可能な移行のためのガバナンスを探ります。

担当授業科目
SDGs入門　環境と国際協力 地球環境政策論
環境と国際協力演習　多文化公共圏実践演習（グローカル）
ジェンダー論（他８名）

wakana@cc.utsunomiya-u.ac.jp

日本語学　日本語史



高山　道代　たかやま　みちよ

「ことば」は人々の使用の中で、また、他言語との接触をとおして変容しつづける存在といえます。世界の言語は一般的に三千種ほどにわかれるといわれています。そのなかで日本語はどのような点で普遍性また独自性をもつのかについて、文法的視座にたった分析を通してとらえていきたいと考えています。また、その際には現代語を対象とする場合でもその背景となる歴史的変容を視野に入れながら、体系的にとらえたいと考えています。

授業では、日本語に関する多様な問題を空間軸、時間軸上の様々な観点からとりあげます。現代語をはじめ、古代語や地域語などの多様な日本語を実際の用例の中で具体的に考え分析することに力を入れます。

担当授業科目
日本語論　日本語史　日本語論演習

mtakayama@cc.utsunomiya-u.ac.jp

多文化共生教育

立花　有希　たちばな　ゆき

比較教育学が専門で、主にドイツの異文化間教育について研究しています。文化、言語の異なる子どもが在籍しているとき、学校にはどのような対応が求められるのでしょうか。また、多文化化、多言語化する社会のなかで、学校教育はどのように変化するべきでしょうか。そうした問いに答えるためには、歴史や国際比較に学ぶ必要があります。

授業では、多文化社会における教育を考える上で重要な理論と実践について、国内外のさまざまな文献や事例を参照し、これからの多文化社会について議論していきます。

担当授業科目
多文化共生教育　多文化共生教育演習
外国語特別演習（ドイツ語）

tachibana@cc.utsunomiya-u.ac.jp

教育社会学　外国語教育

戚　傑　チー　ジエ

ポスト構造主義・ポスト植民地主義の視点から学校教育・言語教育に関する研究・分析を行っています。現在関心を持って取り組んでいるのは日米中における大学入試制度と学力観・人間形成観の相違に関する研究です。具体的には、社会や教育がどのようにして人間を形成し、一旦形成された価値基準が社会や教育にどのように影響を及ぼすかについて論理と実証の両面から検証を試みています。これに加えて、グローバリゼーションと多文化教育の在り方に関する研究も行っています。従来、多文化論は、異なる文化背景を持っている人間同士が「交流・理解できること」を前提に展開されましたが、紛争の絶えない世界の現実を見る限り、他者を理解したつもりのミスコミュニケーションは他者を理解する障害にさえなるとも言えます。そこで、この「理解可能な他者」を前提とするよりも、理解できない「文化的な溝」を分析することにより多文化教育の在り方を探求しています。なお、授業では、学生の理論的思考力と創造性を引き出すことに重点を置き、異なる文化をもつ人々とコミュニケーションをとる際に必要な能力と態度を養うことを目指しています。

担当授業科目
移民と多文化教育　移民と多文化教育演習
グローバル化と外国人児童生徒教育（他６名）
Japanese Communication Arts（基盤教育科目）

jqi@cc.utsunomiya-u.ac.jp

比較文学比較文化　日本文学　韓国文学

丁　貴連　チョン　キリョン

ヨーロッパ文学の影響を強く受けた日本の近代文学が、韓国や中国、台湾といった東アジア地域の近代文学に及ぼした影響関係について研究しています。対象となる作家及び作品は、明治期日本の文学的現実にあって、社会を嚮道してきたワーズワースやモーパッサン、ツルゲーネフなどのヨーロッパ文学と、その影響を強く受けた日本文学、そして日本文学に影響された韓国文学です。つまり、日欧韓の三者間を巡る近代文学の成立過程を研究しています。このような比較文学研究は、西洋文学の一方的な受信者と知られる日本近代文学が、実は韓国や中国、台湾といった東アジア地域の近代文学に大きな影響を及ぼしていたというもう一つの顔を浮き彫りにすることができます。日中韓、日欧韓といった比較の視点から東アジアの近代化の過程を考えるのが目下の関心です。

担当授業科目
ジェンダー論（他8人）
韓国文化論　韓国文化論演習
比較文学　韓国文学（基盤教育科目）

jeong@cc.utsunomiya-u.ac.jp

感情心理学　社会心理学

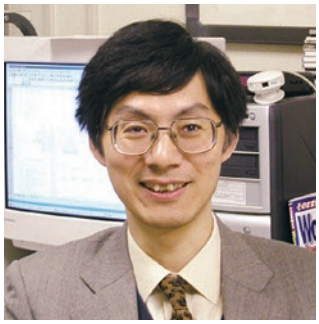
中村　真　なかむら　まこと

感情とコミュニケーションの心理学について研究しています。特に表情に表れる感情とその判断に興味があります。表情を通した感情のコミュニケーションは、人間のあらゆるコミュニケーションの基礎になるものです。いくつかの感情を表す表情は、生まれながらといってもよいほど発達のごく初期から人間に備わっています。新生児は泣いたり、笑ったりすることで周囲の人間に情報を伝え、適切な働きかけを促します。また、子供は発達のプロセスを通じて、自分の表情、感情表現を適切にコントロールするための規則を学んでいます。このような規則には文化などの集団による違いもあり、その違いを知らないために様々な誤解が生まれる可能性もあります。最近は、感情と排斥行動の問題についての研究も進めています。

担当授業科目
異文化間コミュニケーション
対人コミュニケーション論
対人コミュニケーション論実験

nakamura@cc.utsunomiya-u.ac.jp

情報科学



倪　永茂　にい　よんも

今日の情報化社会において、インターネットは人々の生活の基盤やコミュニケーションの基盤となりつつあり、広く利用されています。Webページのリンク情報を集めた巨大なデータベースに、世界の何十億もの人々がアクセスし、日常的に情報検索・情報発信・情報収集を行なっています。また、スマートフォンを肌身離さずSNSを利用している人が大勢います。コロナ禍でも、インターネットと情報機器が有効に活用され、遠隔教育やテレワーク（リモートワーク）が可能になったのです。

国際社会の相互理解の新しい手段として情報ネットワークシステムを捉え、その利用の可能性と課題を情報科学等の学際的視点から探求しながら、情報化社会に貢献することを目標に、教育研究を行っています。

担当授業科目
情報と倫理
情報ネットワーク概論
情報ネットワーク実習

niy@cc.utsunomiya-u.ac.jp

国際法、国際人権・刑事法、平和構築論

藤井　広重　ふじい　ひろしげ

紛争後の国家再建における司法の役割を中心に、アフリカ地域での事例研究に取り組んでいます。初めてアフリカを訪問したのはボランティアとして、その後も仕事や調査のため数か国に滞在しました。そして、その度に「私」とは異なる様々な違いに気付かされます。しかし、これは「アフリカ」と「私」に限ったことではありません。この世界中に、また日本国内にも、違いを持つたくさんの人々が生活しています。この違いは、私達の生活を豊かにしてくれますが、時に深刻な事態をもたらすこともあります。私たちは「違い」がもたらす不正義に対し、如何に向き合うべきでしょうか。アンリー・デュナンやキング牧師は、不正義を克服し、より良い社会を目指して活動しました。私は、彼らの活動を支えたのは、人々からの支持だけではなく、彼らの「意志」だと思います。そして、私が専門とする分野の学びは、理想とする社会を議論することで自らの「意志」を育む機会でもあると考えます。南アフリカのネルソン・マンデラは、政治犯として27年間投獄されながらも、後に大統領となりアパルトヘイトを廃止します。そんな彼が、次のような言葉を残しています。「One of the most difficult things is not to change society – but to change yourself.」より良い社会に向かうための鍵は、私達自身が握っているのです。

担当授業科目
国際法演習、International Protection of Human Rights
International Humanitarian Law in Theory and Practice

fujiih@cc.utsunomiya-u.ac.jp

フランス文学、ヨーロッパ思想史

槙野　佳奈子　まきの　かなこ

私が研究対象としているのは、19世紀のフランス文学・思想・文化になります。留学先で提出した博士論文では、1839年にパリで公式発表された写真技術が当時のフランスにおいてどのような存在として受け入れられ、人々はその芸術性についてどのように捉えることになったのかを、同時代の科学普及活動家ルイ・フィギエ(1819-1894)という人物の見解を中心に分析しました。最近では、このフィギエという人物が「科学」と「非科学」の境界をいかに捉えていたのか、という観点から新たに研究を進めています。

皆さんも大学で、これまで自分の知らなかった言語を努力して学んだり、これまで手に取ったことのないような文献を読み込んだりすることで、自分の中で何かが変わっていくような感覚が味わえると思います。自ら考え、自分の言葉で語ることの面白さ、そして他人の言葉にも耳を傾けて違いを尊重し合う楽しさを、大事にできればと思っています。

担当授業科目
フランス文化論　フランス語講読
フランス文化論演習

kmakino@cc.utsunomiya-u.ac.jp

比較日本文化論・身体文化

松井　貴子　まつい　たかこ

日本って何でしょう？

自分が生まれ育った日本を客観的に眺め、理解するために、私には他者の視点が必要でした。日本文学を経て比較文学比較文化に出会い、現代につながる近代日本を研究の対象に選びました。

日本の近代化は急速な西洋摂取によって進められました。その結果、近代日本は、前時代から隔絶したかに見えながらも、そこには、日本が東アジアから摂取した伝統文化が確かに底流しています。変動する時代のなかで、文学も、文学以外の様々な文化や歴史、社会の動きと連関しながら、日々新たに創造され、生き続けてきました。

西洋受容に関わる伝統の継承と断絶という視点から、日本の近代化の特質や本質を明らかにすることを目指しています。

そして、現代の日本に現前する多文化環境から、文化間の異質性と同質性を見出して、文化が融合し、解離する様相について、その意味を考え続けています。

担当授業科目
日本文化論　日本文化論演習　身体文化
多文化公共圏実践演習（グローバル/グローカル）

mtaka@cc.utsunomiya-u.ac.jp

地域研究（中東）

松尾　昌樹　まつお　まさき

中東地域の政治経済現象について研究しています。中東地域は石油や紛争、イスラームや非民主主義的な政治体制でよく知られています。それに加えて、中東は世界最大の移民受け入れ地域でもあり、多様な文化的背景を持った人々から構成されています。こうした特徴をもとに、莫大な石油収入を国民に配分することで非民主的な統治制度を維持する政治経済システム（レンティア国家）や、大量の移民を受け入れることが民主主義の定着を阻害する統治制度（エスノクラシー）について研究しています。

石油や移民、（非）民主主義的統治といったテーマは、21世紀のグローバル世界を考える上で非常に重要で、こうした特徴が顕著な中東地域の研究から得られた知見は、しばしば中東以外の地域の研究にも役立てられています。このため、中東以外の多様な地域を研究する学問であるエリアスタディーズも担当しています。また、さまざまな地域での現地調査に加えて、統計資料やサーベイ調査から得られた多様なデータをコンピューターが作り出したモデルに投入して分析する計量分析にも取り組んでいます。皆さんも、多様な地域を一緒に研究しませんか？

担当授業科目
データサイエンスとエリアスタディーズ　中東地域研究
中東地域研究演習

matsuom@cc.utsunomiya-u.ac.jp

東アジア国際政治

松村　史紀　まつむら　ふみのり

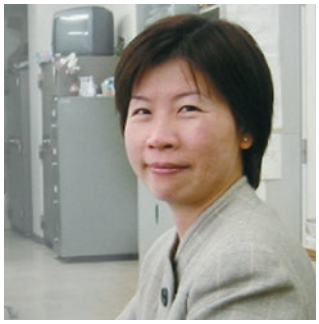
国際政治の舞台では好戦的で権力闘争に長け、悪意をもった勢力ばかりが危機を引き起こすとは限らない。正義や平和をかかげた人間が期待を裏切り、愚行と悲劇に終わることもめずらしくない。

国際政治の歴史を学ぶことは、悲劇を引き起こした犯人をさがし、論難することではなく、そのような恐怖のもとにおかれた人間を深く理解することにほかならない。いまを生きる人間は現代の価値観に基づき、事態の結末を知っているという優位な立場から過去の愚行を嗤い、厳しく裁くことに慣れている。それを「歴史の教訓」だと自負すれば、恐怖にかられた人間と対話する機会は生まれないだろうし、みずから現代の特権を享受しているという自覚さえめばえない。切迫した状況のなか、限られた情報と資源しか与えられない人間にどのような選択が許されたのか。この難題を考えることが過去の人間と対話するわずかな手がかりとなるだろうし、未来へのささやかな道標にもなるだろう。

担当授業科目
国際政治論　近現代中国論　国際政治論演習

f-matsu@cc.utsunomiya-u.ac.jp

産業社会学　地域社会学



Malee Kaewmanotham　マリー　ケオマノータム

1980年代の半ば以降、日本にはアジアからの労働者が大量に流入しています。この背景には日本とアジアの大きな経済格差があり、アジア系外国人の多くは「不法」就労者として人権を保障されないままに日本社会の底辺で暮らすことになりました。私は日本とアジアの人々がお互いの違いを尊重しながら対等な関係を築くことが重要であると考え、外国人労働者の実態調査に取り組んでいます。また、母国であるタイでは、首都バンコクの地域調査を行っています。タイは日系企業の進出などにより業化が進み、バンコクと農村の地域格差が拡大しています。そして農村では貧困、バンコクでは人口集中による都市問題が発生しています。農村出身者の多くはバンコクでスラムを形成し、劣悪な居住環境での生活を強いられています。そうした恵まれない条件におかれた人々が自分たちの生活を守り、改善していくために結成するのが地域住民組織です。私は、この実態調査をとおして、住民の権利と自治を保障する望ましい社会開発のあり方を考えています。

担当授業科目
東南アジア論　タイ都市社会論
東南アジア論演習　外国語特別演習（タイ語）
外国語臨地演習（タイ語）

malee@cc.utsunomiya-u.ac.jp

英語音声学　音響音声学

湯澤　伸夫　ゆざわ　のぶお

英語の音声を分節音とプロソディの観点から科学的に研究する英語音声学が専門です。研究には音声を正確に聞き取ること，発音記号を正確に読めること，音声を正確に発音記号で書くことも重要な技能になります。単に本を読んで理解しただけでは済まされません。英語の音声の研究にはコンピュータによる分析は欠かせません。工学研究者の研究成果により今後ますます優れたソフトウエアが作られ，より精度の高い研究ができることを期待しています。

研究対象としている英語の音声は、基本的にBBC accent（RP）とGAです。この他に，世界で使用されている様々な英語の音声もできる限り研究対象としたいと思います。日本人英語学習者が守らなければならない英語の音声の特徴の計量的な研究も進めたいと思いますし，将来的には学際的な研究を通して自動音声翻訳機の開発やTTSプログラムの改良にも挑戦したいと思っています。

担当授業科目
Phonetics and Phonology
Presentation and Discussion

yuzawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp

一般言語学　教育学

吉田　一彦　よしだ　かずひこ

言語とコミュニケーションの本質は何か？ということを追究しています。相互理解と誤解の両方のメカニズムに関心を持ち、個々の言語現象を、類似の現象や他の言語と比較・対照し相対化してみる作業を大事なことだと考えています。日本語・フランス語・英語・タイ語・モンゴル語・中国語・ポルトガル語・スペイン語・ベトナム語など、複数の言語をみずから学び、多言語コミュニケーションの実践をとおして研究課題を見つけ、記述的にも理論的にも現象の解明と取り組んできました。

自分自身留学生として非常に有意義な日々を過ごしました。今でも昨日のことのように思い出します。また、機会に恵まれ、30以上の国を訪ね、おそらく100を超える国籍の人々と共同作業をしてきました。国籍や思想や歴史観、文化・社会背景が違う人間が共同作業し、互いをリスペクトし、自分が何者であるかを忘れるぐらい熱心に学び合える、そんな機会を大学での教育・研究活動をとおして実現したいと考えています。そして、これから世界に出て行く人のサポートとも取り組んでいます。

担当授業科目
多言語コミュニケーション学A/B（基盤教育）
Linguistic Typology and Language Communication
日本語教育と国際協力演習

ysd@cc.utsunomiya-u.ac.jp

アメリカ文学　アメリカ文化研究

米山　正文　よねやま　まさふみ

私の研究対象は19世紀のアメリカ合衆国の文学です。他の国でもそうかもしれませんが、合衆国の場合とりわけ文学が国造りと関わってきました。18世紀末にイギリスから独立し新しい国家ができたとき、作家たちは地域・民族・階級で分裂していた人々に、新しい国の特徴や価値観を意識的に描いていきました。私の研究対象は、こうした作家たちの詩や小説のみならず、パンフレット、新聞記事、演説など文字にされたもの全般になります。ナショナル・アイデンティティーを構築しようという共通性とともに、こうした作家たちの中の多様性にも注目したいと思っています。それによって合衆国の形成されていく複雑な過程を追うのが私の目的です。

担当授業科目
アメリカ文化論　アメリカ文学史
アメリカ文化論演習

yone@cc.utsunomiya-u.ac.jp

文化人類学

Lee Perez Fabio　リーペレス　ファビオ

文化人類学は人の生き方を文化の側面から理解していく学問です。私は、ライフストーリーの交換という研究法で、この問題にアプローチしています。ライフストーリーは、その人が、生まれてから今日までの間に起きた出来事、生き方、物事に対する考え方や感じたことについての語りから、文化について考えます。私は、ライフストーリーを聞かせてもらうという行為には、「君のこと教えてよ」「じゃ、君のことも聞かせてよ」というように、相手にも自分のライフストーリーを聞かせるという相互関係があると思います。お互いのライフストーリーの交換を通して異文化の相互理解ができるんじゃないか？と考えています。

私は、両親の国籍が異なり、幼い頃から複数の国家、言語、文化を跨いで生きる人々「ストレンジャー」の生き方を調査しています。「外国につながりを持つ人」、「ハーフ」や「移動する子ども」と称される人々の調査もしています。最近は、文化的背景が異なる人々が互いの持つ差異と向き合い、いかに友人関係を築いているのかを明らかにすることを目的とした研究に着手しています。

ちなみに、趣味はサイクリングと怪獣フィギュア収集と映画鑑賞と料理です。

担当授業科目
文化人類学　民族誌学　スペイン語購読

lee.perez.fabio@cc.utsunomiya-u.ac.jp

留学生・国際交流センター Center for International Exchange

国際協力　コミュニティ防災

飯塚　明子　いいづか　あきこ

防災は災害が多発する日本だけでなく、世界的に大きな課題です。私はこれまで日本、ベトナム、スリランカ、イラン、アフガニスタン等と言った国内外の被災地で、大学の研究員、防災専門国際NGOの職員、国連職員という様々な立場から災害復興支援に従事してきました。その過程で、コミュニティを核とした防災（災害発生前の備え、災害発生後の緊急、復旧、復興期の対策）の必要性を強く感じ、現在の研究に至っています。

コミュニティ防災は、社会学、地域研究学、心理学、工学、政治学、国際協力学、文化人類学等の幅広い専門領域を網羅する学際的なテーマです。国内外の被災地の多様なリアリティーを捉え、多面的に理解し、包括的な提案ができるよう、一緒に学んでいきたいと思っています。

また大学（米国）と大学院（オランダ）で留学を経験し、インドでNGOインターン、ベトナムとスリランカでは防災国際協力に関連する仕事で駐在したことがあります。授業や専門分野に関わらず、留学や国際交流に興味のある方はぜひご相談下さいね。

担当授業科目
グローバル入門（基盤）　Risk Management
国際インターンシップ　Disaster Studies演習

iizuka@cc.utsunomiya-u.ac.jp